

複言語共通語彙テストの実施と考察 —名古屋外大の複言語プログラムに関連して—

大岩昌子(名古屋外国語大学)

1. 複言語プログラム

名古屋外国語大学では、2017年度に「複言語プログラム」の全学化が施行された。本学のダイバーシティの要として、以下の3点を学修目標として掲げている。

- ① 複数の言語を理解し、使い分けのできる言語能力と複合的なコミュニケーション能力を獲得する。
- ② 世界に息づく文化や歴史の多様性に気づき、他者の文化的アイデンティティに対する寛容な心を身につける。
- ③ 社会的な主体として、世界市民として、未知の世界に対する好奇心を持つ。

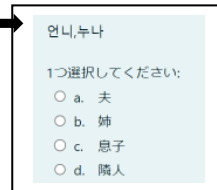
履修言語としては、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、ロシア語、アラビア語、中国語、韓国語、インドネシア語、タイ語の12言語が設定され、それぞれ、初級科目、中級科目、上級科目が用意されている。必修単位は学部・学科によって異なるものの、12～16単位と多く、全学生が3年次以降も複言語プログラムからなんらかの授業を履修する仕組みとなっている。複言語プログラム部門には先の12言語のコーディネータがおかれ、開講クラス数・担当者の決定、授業内容・統一教科書の決定など、言語内の統一に向けた重要な役割を担っている。また、同じく2017年度より、『世界の言語』というオムニバス形式の授業が設定された。1期はアジア圏、2期はヨーロッパ圏を中心とした言語を、各期7～8言語ずつを扱う。さらに、3年次以上になると、半期科目として「複言語特殊講義」を履修することが可能となる。2023年度は、ギリシャ語、ラテン語、スウェーデン語、ポーランド語、ウクライナ語、ベトナム語の6科目が設定されるなど、複言語プログラムは現在の世界の流れに沿いつつも、外国語大学ならではの多様性と独自性を保つよう努力を続けている。なお、本学出版会からは同プログラム用の副読本が刊行されている。

2. 複言語共通語彙バンク製作および Vocabulary learning system の構築

言語内では、コーディネータによる綿密な調整により、各授業の教育内容の統一が徐々に図られてきたが、言語間の統一は非常に難しいと言わざるを得ない。各言語が使用される場面や学習者のニーズなどが多様に広がることを考慮すれば、言語間でなにかを統一させること自体に意味があるのか定かではない。こうした観点から、外国語学習には欠かすことのできない語彙習得を学習者に促すことをまずは共通の課題として認識し、その一環として、英語以外の11言語に共通する語彙バンクの製作、および、これを利用した語彙学習システム Vocabulary learning system の構築を目指した。具体的な手順は以下の通りである。なお、本取組は、2020年度の本学学長裁量費による研究として助成を受けている。

- ① 基本語彙500語(日本語)を討議により選定。これが全言語に共通の語彙バンクとなる。

韓国語の1例



- ② ①を11言語に翻訳。この語彙に対して、3つの誤答を設ける。
- ③ これを基に、Moodle上に多肢選択法の語彙学習システムを構築。
- ④ 解答後、即時採点されるよう自動化。

2022年度から全学生に対して運用を開始した。授業を未履修の言語についても受験が可能のため、独学ツールとして利用する学生も見受けられる。プラットフォームとしてMoodleを利用するため、変更が容易に可能であることも利点として挙げられる。

3. 複言語共通語彙テストの実施と結果

複言語教育の質保証と学習効果の可視化を図る試みのひとつとして、この Vocabulary learning system を用いた、全受講生に共通する語彙テストを試行した。時期は、2022年12月12日～16日の間に、英語以外の11言語の初級科目、中級科目を受講する学生は、50問(50語からランダムに出題される)の語彙テストを受験した。今年度は試行的に実施したため、授業中あるいは自宅での受験となった。条件として、試験時間は8分に設定、辞書の参照は不可とした。この結果は成績評価に組み込まれない。全受講生の受験を呼びかけたが、アナウンスの期間が短かったこともあり、初級レベルの受験率が65%、中級レベルでは58%と、おおよそ6割程度にとどまった。平均正答率は初級で65.9%、中級で75.9%であった。発表では、以下のグラフに示す通り、言語別・レベル別に考察を行う予定である。

